

## 戦局を左右した レジスタンス活動

第二次世界大戦における戦勝五大国のうち、フランスは欧州で戦争が行われた全期間（一九三九年九月から四五年五月までの六九か月）の実に七割（四八か月）近くの間、敵国のドイツ軍による実質的な占領統治下に甘んじることとを余儀なくされた。

大戦勃発直後の段階では、フランス政府と軍の首脳部は、第一次大戦での輝かしい勝利の経験と、東部国境に構築した難攻不落の要塞「マジノ線」の効果に絶大な自信を抱いており、来るべきドイツとの戦争においても、フランス軍は敵に遜色のない戦いぶりを見せるものと期待されていた。

ところが、ドイツ軍が一九四〇年五月に西部戦線で大規模な攻勢作戦を開

始し、戦車と急降下爆撃機を巧みに組み合わせた新戦術「電撃戦（ブリッツクリーク）」を展開すると、第一次大戦型の用兵思想に固執するフランス軍やベルギー軍は瞬く間に防衛線を崩壊させられ、ヨーロッパの誇り高さ大國フランスはそれからわずか六週間後、屈辱的な降伏文書への調印を強いられることとなった。

しかし、ヒトラーを頂点とするドイツ第三帝國による間接的な支配を快く思わないフランス国民は、各地で自発的に抵抗運動を開始し、非力な武器でドイツ占領軍に対する武力闘争を繰り返していった。ゲリラ対正規軍という図式の中では、ゲリラ側であるレジスタンス組織は常に苦境に立たされ続けたが、決して途絶えることのない彼らの地道な闘争は、ドイツ軍の占領政策

に対して、いつしかボデイブローのように徐々に効果をもたらし始めていた。そして、一九四四年六月、待ちに待った米英連合軍の欧州大陸反攻作戦「オーヴァーロード」（ノルマンディ上陸作戦）が開始されると、フランスのレジスタンス組織は情報収集と敵後方の破壊工作という二つの分野を中心に上陸部隊の軍事作戦をサポートし、フランス解放からドイツ降伏に至るドラマの中で重要な役割を担うこととなったの

## 《反独レジスタンスの発生》

### フランス降伏と 占領統治の始まり

一九四〇年五月十日、ドイツ第三帝國の総統アドルフ・ヒトラーは、西欧の大國フランスとベネルクス三国の攻

である。

それでは、フランスにおける「祖国解放」の立役者として、今なお国内で賞賛される反独レジスタンス組織は、どのような経緯を経て誕生したのか。ドイツ軍の占領統治下にあるフランスの国民は、彼らの存在をどう受け止めたのか。そして、彼らはいかなる方法でドイツ軍の強大な占領部隊と対峙し、彼らの闘争は第二次大戦の趨勢にどれほどの影響をもたらしたのだろうか。

略を目指す大軍事作戦「黄色の場合」を發動させた。

1944年8月、セーヌ河口に近い村落に進行した英軍を迎える、フランス・レジスタンスの闘士たち。6月の連合軍のノルマンディ上陸の前後、地下から表舞台上に登場した彼らの活動は最高潮に達し、独軍への交通・通信等に対する破壊工作や、連合軍兵士を独軍狙撃兵から守るなど大活躍した（AP/WWP）。



文=山崎雅弘

戦車と自動車化歩兵による迅速な突破侵攻に重点を置いたドイツ軍の大攻勢は、フランス軍指導部の予想を上回るスピードで、彼らが「大部隊の通過は不可能」と思い込んでいたアルデンヌの森林地帯を突破した後、ベルギー正面に展開していた英仏連合軍の主力を包囲することに成功。六月十四日には、戦火による人的・物的被害を避けるため「無防備都市」を宣言していた首都パリに、ドイツ軍部隊が無血入城を果たした。

